

奈良・藤原宮跡
ふじわらきゅう

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
 - 2 調査期間 第一〇七次調査 二〇〇〇年(平12)三月―一月
 - 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
 - 4 調査担当者 代表 黒崎 直
 - 5 遺跡の種類 宮殿・集落跡
 - 6 遺跡の年代 古墳時代―鎌倉時代
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 調査地は、藤原宮朝堂院の東第一堂北半と回廊の東北隅部にあたる。戦前に日本古文化研究所によって部分的調査が実施されているが、約三一四〇m²にわたって面的に再調査した結果、建物構造に関する多くの知見を得ることができた。とくに東第一堂SB九一〇〇について、日本古文化研究所の調査結果とは異なっており、総柱建物ではないことを明らかにした点は、諸宮の朝堂の変遷を考える上で重要な成果である。また、藤原宮期以外の遺構も多数検出しており、調査区の西半部では、掘立柱建物・井戸・溝など、中世集落に関する遺構が顕著であった。
- 木簡は、次の三カ所から計三点(うち削屑一点)が出土した。

第一は、藤原宮直前期の先行四条大路南側溝SD九〇〇五である。幅一・五m深さ1m以上の素掘溝で、木簡が一点出土した。五文字程度の墨痕が認められるが、釈読は困難である。

第二は南北溝SD九〇四〇である。朝堂院の東面回廊東雨落溝の下層にある素掘溝で、幅約七〇cm深さ約二〇cm。暗灰色の粘土が堆積し、藤原宮造営に伴う木材のはつり屑とみられる多量の木屑を含む。削屑がその中から一点出土した。この溝は黄褐色の粘質土で埋められ、その後同位置に東雨落溝が造られる。

第三は、平安末期から鎌倉時代にかけての南北溝SD九〇四六であり、木簡が一点出土した。当該期の中世遺構は、大きくA・Bの二時期の変遷が認められるが、B期のものである。SD九〇四六は南北溝SD九〇四四と平行し、その間には相互を連結する複数の東西溝があり、梯子状の溝群を形成している。かつて東面回廊があった場所の耕地化に関わる溝群であったと推定される。

8 木簡の积文・内容

SD九〇四〇

(1) 大

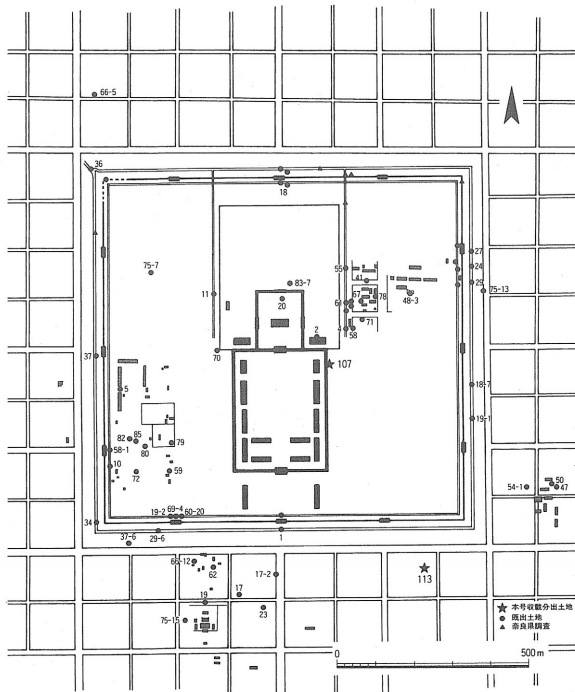
160

SD九〇四六

(2)



(82) × (26) × 3 065



(市 大樹)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一五(二〇〇二年)
 年)

9 関係文献

(2)は上端に穿孔が二つ認められる。左割れの木簡であるが、孔の場所は、一つがほぼ真ん中、もう一つは左端で半円となっている。下端が折れているが、意図的なものか。木簡の内容・用途は不明。